# メディアを取り込む日常生活分析のあり方について
## ―中国の民間活動とメディアの関係から―

田村 和彦
TAMURA Kazuhiko

## 1. 日本民俗学がメディアを扱うことの困難①
### ―記録メディアへの偏重―

メディアを主題として、日本民俗学の研究蓄積から語ることは容易ではない。それは、一方で、民俗学が「伝承」を重視する学問であると同時に、他方ではその視野を伝統的な媒体に限定する傾向を持つことによる、と考えられる。

そこで、本稿では、初めに、メディアをめぐる日本民俗学の状況を概観し、そのうえで、メディアをそれぞれの研究に取り込む視野について、中国の「広場ダンス」を事例に試論する。筆者は、メディアを考察の中心としてきたわけではないこともあり、先行研究の概括は筆者の力量を超えるが、あくまで一つの試論としてご理解いただければ幸いである。

そもそも、媒体としてのメディアは、一般的に二つの方向性から検討可能な対象である、といえる。一つ目の可能性は、記録媒体としてのメディアであり、書籍や映像資料などがこれにあたる。日本民俗学では、学会誌を考察の手掛かりとすれば、「映像記録」や「記録映像」は、たびたび取り上げられていることが確認できる。近年では、2010年264号の小特集の「民俗学と映像記録」や、2012年の第864回談話会で遠藤協氏によって上演と報告がおこなわれた「映像民俗学の新展開」がこれに該当する。口承の重視と同時に、メディアの一分野である文書や日記、地方誌など、文字や絵画を介した記録の考察に力を注いできた民俗学にあって、民俗行事を記録する手段として新たに映像が加わったことで、メディアの民俗学的研究手法として、注目されたことは不思議ではない。その意味で、民俗学的メディア研究においては、この記録媒体としてのメディアを中心として先行研究が蓄積されてきた点を指摘できよう。

興味深いことに、隣接分野である文化人類学、民族学においても、記録媒体としてのメディアの側面が最初にあらわれている。日本では、杉田繁治によって、1974年という早い時期に「コンピュータ民族学」が提唱され、国立民族学博物館の第5研究部（通文化研究）の一部門に位置付けられていた。その背景には、国立民族学博物館設立の際、初代館長梅棹忠夫の発案により、電子計算機を用いて、博物館所蔵のあらゆる資料を記録、整理、検索可能とし、文化人類学の調査データの分析およびデータベース化に利用しようとする構想のもとで生まれた着想だった、といわれている［奥野 2009］。コンピュータが普及していなかった当時にあって、特殊な技術としてのコンピュータが、それを使用する人々の研究へと展開するには更なる時間が必要であった。もっとも、杉田の提唱する「コンピュータ民族学」は、単なる記録を検索するためのアルゴリズムにとど

まらず、「人間が持っている漠然とした潜在的な知識、本人も気がついていない情報を、いかにしておもてに引きだすか、その工夫をコンピュータ関連の技術を駆使して実現しようとする」、射程の長い構想を伴っていたことにも注意しなければならない。

その後、コンピュータ民族学の対象としては、以下の4点が挙げられた。

（1）民族学研究におけるデータベースの作成　［杉田 1994縮刷版］

（2）情報の加工

（3）モデル・シュミレーションによる研究

（4）物質文化の対象としてのコンピュータ

本稿の関心は、広い意味、すなわち、操作対象であるとともに、操作者に変化を促すモノとしての技術にあり、この4番目の項目に該当する。そして、これが、ふたつ目の方向性になるわけだが、その前に、続けて、近年の文化人類学に言及しておきたい。2009年に日本文化人類学会が編纂した新『文化人類学事典』には、メディアとして、一括して「携帯とインターネット」の項目が設けられている［木村 2009］。ここでは、携帯電話、電子メール、電子掲示板、ホームページが取り上げられている。この背景には、人類学の眼差し、すなわち、フィールドワークのなかで、知の回路や日常世界の構成といった、生活の中に浸潤するメディアを取り上げれば、携帯電話やインターネットと向き合わざるを得ない点にあろう。すなわち、これらのメディアは、一部の人々しかアクセスできない特別な技術であった段階では、専門家の記録媒体としての側面が注目されていたが、技術革新が急速に進み、それが多くの人々の手にするところとなり、フィールドで目に入る段階になると、研究対象としての視野に取り込まれた、と考えられる。少なくとも、フィールドワークという全人的な営みには、焦点を絞って作成する調査計画を超えた人々の生活の有り様が目に入るものである[1]。実際に、人類学においては、インターネットやメディアを介して形成されるコミュニティへの関心は2000年代にはすでにみられていたし［例えばWilson and Person 2003］、本稿の関心である、携帯電話に限ってみても、日本で出版されている文化人類学の和書のなかにも、近年、アフリカの各地での携帯電話というコミュニケーションメディアの展開を取り上げた『メディアのフィールドワークーアフリカとケータイの未来』［羽渕ほか：2012］、携帯電話という道具が日常生活に入り込むことによって生じた変化を考察した『ケータイの文化人類学』［金 2016］など、文化人類学においてはこのメディアはすでに重要な考察対象となっている。この傾向は、日本民俗学と対照的である。こうした人類学の研究の発展の背景には、それぞれのフィールドで、ラジオやカセットデッキなどのテクノロジーと人々の関係に注意を払ってきた人類学の蓄積がある、と考えられる［関本 1986、宮武 1995、2000］。

問題は、なぜ、民俗学においては積極的な考察が図られてこなかったのか、という点であろう。この問題は、おそらく、日本民俗学的にコミュニケーションメディアを扱うことの困難さに直結するわけだが、筆者の考察として、仮説的に、隣接分野との関係に理由の一つを求めてみたい。すなわち、日本民俗学が大学のなかで教育される学問となる過程、すなわち、学問領域を再設置する際に意識された学問領域が歴史学であったことである［林 2011］。歴史学が考古学を除いて、当時、文字資料を中心に扱う学問であったのに対して、文字によらない伝承を扱う点を強調した結果、対象レベルで相違を形成すると同時に、過去と記録とを重視する傾向に繋がったのではないだろうか。その結果、記録を作成するメディアの機能について検討がなされ、世界的にも稀な膨大な記録という大きな蓄積を持つことができた一方で、以下で述べる、同時代的に生活を構成するモノとしてのメディアへの関心は主要なものとなりえなかったのであろう。これを、コミュニケーションメディアを考察する第一の困難と考える。

## 2. 日本民俗学がメディアを扱うことの困難②
## ―「世代を超えて伝承」、「民具」といった概念の問題―

民俗学の研究上、メディアをとりあげるふたつ目の方向性としては、先の杉田の分類項目では、4番目の、それそのものが対象となるメディア研究が挙げられる。もっとも広義のメディア（媒体）が、あらゆるものを含むとすれば、この方向性は、traditionを伝承と訳し、研究の中心に据えた従来の民俗学研究と強い連続性をもつものだが、新たな技術に基づくメディアそれ自体が明確化されることは少なかった。少なくとも、日本民俗学の学会誌である『日本民俗学』では、記録としての民俗映像が特集化されることはあっても、これらのメディアで特集を組むことはなかったように思われ、全体としては低調であった。早くは柳田による『明治大正史世相篇』の序文で、新聞記事を対象とする試みと、それを直接の対象として現実の社会事相を明らかにする困難さが掲げられたにもかかわらず[2]、民俗学にとってマスメディアの対象化は、ほとんど着手されてこなかった［柳田 1931（1993）］。おそらく、その理由としては、メディアで報じられる現象と、日常との距離の問題ではなく、民俗学を「全国各地において世代を超えて伝承されてきたならわし、しきたり、いいつたえという民俗事象を資料として研究する学問」と自己規定したことにあろう［福田 1983］。この、「世代を超えて」という点を強調する認識に立てば、マスであれ、パーソナルであれ、メディアで伝達される内容が一回性的な現象、あるいは「流行」として捉えられ、民俗学の考察対象から零れ落ちることとなる。その結果、そこで語られる、現象の理解枠組みが、我々が認知的な「生活世界」を構築してゆき、現象の位置づけそのものも、「生活世界」の影響を受けて成形を施されるような相互作用が、民俗学のなかで十分に考察されてこなかった。これは民俗学に関する事典レベルでも確認できる。2000年に出版された、大規模な事典である『日本民俗大辞典』では、「テレビ」とならんで、阿南透による「電話」の項目が設けられ、携帯電話にも言及されているが、その後に編纂された辞典では、過去からの継承が強調されたためか、旧来の「民俗」を対象とした項目に回帰し、初学者の利用を視野に入れているにもかかわらず、本稿でとりあげるメディアは項目として採用されていない［阿南 2000:173-174、福田・新谷・湯川・神田・中込・渡邊編 2006］。

民俗学のなかで、メディアという新たな科学技術に関心を示したのは、口承文芸、世間話研究の人々であった。彼らは、古くは1970年代の「口裂け女」、1980年代後半の「人面犬」など、従来の口承とならんで、マスメディアを介した都市伝説（Urban Legend）の伝播を考察の視野に含め、近年ではインターネット上で創造、共有される対象をNet-Lore（「電承」）として、分析する方向も打ち出されている［伊藤 2008、2016］[3]。ただし、複数対複数の、マスメディアとパーソナルメディアの中間としての機能に着目しつつも、現在のところ、その研究は、ネット空間での都市伝説を中心とする説話に終始している。その結果、本稿の関心事である、人々がモノとしてのメディア自体を社会的文脈に当てはめ、本来の用法を拡張し、流用し、創造する、それと同時に、従来の生活世界もまたメディアの使用により変化してゆく関係性を十分に捉えられてはいないと考える。

いずれにせよ、この意味では、インターネット誕生（1989年3月12日）から1万日を経過した現在でも、かつて森栗が指摘したように、「情報化社会の伝承に向き合っているのは口承文芸研究であ」るという傾向は、今日でも続いているといえよう［森栗 2001］[4]。

この、研究対象としてのメディアは、その下位でさらに、マスメディアと、パーソナルメディアとして考えることが可能であろう。

暗黙裡に、様々な価値規範を順当に配置して物語を形成し、伝達するメディアとしての新聞のニュース（マスメディア）については、岩本氏の論考で検討されるであろうから、ここでは、もう一つの、パーソナルメディアの代表として、携帯電話についての日中事例をとりあげてみたい。携帯電話と、マスメディアとは、ともに空間を超越する特徴をもつが、両者の最も大きな差異は、携帯電話が双方向的なメディアである点にある。マスメディアが、基本的には一方的な情報の伝達であるのに比べ、電話は、登場した時点から、すでにお互いが同時的コミュニケーションに加わる双方向性を具有しており、今日普及しているスマートフォンにいたっては、音声のみならず、2011年に誕生したメッセンジャーアプリである微信（WeChat、日本で使用されているLINEに相当する[5]）のように、文字や写真、動画、グループチャット機能をもつに至っており、SNSとして、コミュニティ機能が加わる。

この、携帯電話は言うまでもなく電話の一部であるが、電話というメディアを人文科学研究の俎上に載せることは、決して奇妙ではない点にもさきに簡単な説明が必要であろう。メディア研究の領域では、新聞やテレビがマスメディアの中心として、早くから社会学の研究対象とされてきたのに対し、電話は、吉見らが引用するように、1980年代にG.FielddingとP.Hartleyが的確に指摘したように、「マスコミュニケーションについての社会学的研究と対面的コミュニケーションについての社会心理学的研究の狭間で、研究対象として制度的に見過ごされてしまっている」「無視されたメディア」であった、という［吉見ほか 1992］。しかし、1980年代ころからの、日本の社会学においては、電話研究の必要性が改めて確認されてゆく。その意味では、他のメディア研究に比べて着手が遅かったとはいえ、メディアとしての電話研究は、社会学が先駆的であったということができる。そこでは、主に、社会の側から、新たなテクノロジーと社会とが出会い、相互に変容してゆく過程を描いていた。だが、これらの動向が直接日本民俗学へと影響を与えることはなかったようである。その理由として、もちろん、民俗学そのものが、先述のように、新たな科学技術としての電話、携帯電話を対象化できなかったことがなによりも大きいが、また、民俗学が微視的な質的調査を基本とすることにも起因している。電話の持つ、空間の超越という特質は、対象の分散化を意味し、いわゆるフィールドワークで全体像を補足することが困難となる。しかし、この問題は、文化人類学が示しているように、おそらく「対象化」の工夫で緩和される性質のものであり、そもそも生活の方法の探求を掲げ、現在学を標榜する学問にあっては、このメディアに取り組む必要がある、というのが本稿の主張である。

その際に、手掛かりとなる論考として、学会誌上、ほぼ唯一の携帯電話についての論考である、林英一による「生活道具としての携帯電話」がある［林 2001］。林の問題意識は、非常に明確である。民俗学研究においてモノを対象とする研究としては「民具」研究があるが、「過去の生活の場面に使われていた道具の研究ということになり、過去的＝伝統的であることに存在の意味が見出されることになる」ことを問題点とし、よって、林の論考では、「民具」ではなく、「生活道具」の語を用いることで、携帯電話という「モノを通してみた人々の姿」に考察の中心を位置づけている［林 2001:86］。教育の現場からの、あらたに普及したメディア発見という意味で、J.Dorstの問題提起と通底する動機が背景にあることが興味深いが、2001年に発表されたこの論考以降、携帯電話が生活の隅々にまで浸透する一方で、日本民俗学において携帯電話が考察の重要な関心事となってはいない。

この可能性が十分に発展しなかった理由の一つとして、先述の記録媒体としてのメディアが焦点化された考察と同じように、仮説的な考察を挙げて、それを日本民俗学が考察する第二の困難と位置付けてみたい。

ここで指摘する困難は、学術組織の細分化の問題である。携帯電話に代表されるコミュニケーションメディアを民俗学的に検討するとすれば、やり取りされる情報という意味では、口承文芸的な側面を見出すことができ、他方で、携帯電話、スマートフォンというモノに着目すれば、物質文化的側面を見出すことができる。しかし、かつての日本民俗学が包摂していたこれらの関心は、学問の細分化のなかで、口承文芸については「日本口承文芸学会」（Society for Folk-Narrative Research of Japan:1977年創立）へ、モノ研究（といっても、前述の林の指摘にあるように、現在の「民具」研究が、「生活道具」（articles for everyday use）としての携帯電話を扱い得るかは不明だが）については「日本民具学会」（The society for MINGU of Japan:1975年創立）へと分散化している。もちろん、これらの学会員が重複することはあろうが、この細分化による緩やかな「分担」は、おそらくコミュニケーションメディアを主題化するうえで、一定の妨げとなっていよう。

## 3. 日本民俗学がメディアを扱う重要性

以上で検討してきたように、科学技術に裏打ちされた新たなコミュニケーションメディアを日本民俗学的に検討することは、決して容易ではない。しかし、これを民俗学の視野に収める必要がある。その理由をここでは簡単に2点あげて、事例を検討してみたい。一つ目は、民俗学が、生活世界がそうであると多くの人々が思っているところの世界観や、人々が生きてゆくうえで学習してゆく、あるべき規範や正統さ、善悪といった価値観に関心を持ってきたことにある。これらがどのように伝達され（あるいは、されず）、内化されて（あるいは、されず）ゆくのかは、民俗学にとって根幹的な問題である。現代生活を考えるうえで、急速に発展、普及したコミュニケーションメディアは、この問題の結節点の一つとなりうる。

二つ目は、新たな技術やモノが人々の想像力のなかで捉えられ、やがてそれらが日常化し、当たり前になってゆく変化と受容との過程への問題関心がある。民俗学では、それが、あからさまに新しいモノでなくとも、旧来の意味や作用をもつとは限らず、意味や作用のレベルで変化していることを前提していたはずである。とすれば、コミュニケーションメディアとしての携帯電話の発展は、民俗学的にみて興味深い対象となるはずである。

この際に、注意しなければならないのは、かつての人類学的な民族誌にみられた傾向、すなわち、「民族誌的現在」において完全な有機的関係性を備えていた対象社会が、新たな技術を背景とするモノの登場によって変化し、その意味世界の体系性を失うという、喪失の語りであろう。この種の語りの特徴は、過去においての完全性についての緻密な描写と、後半で簡単に触れられる変化についての解説という様式をもつことにある。現代テクノロジーを民族誌に位置付ける人類学的技術研究を推進する宮武は、この分野で優れた論考を刊行しているが、そのなかで、清水による示唆的な公式を引用している［宮武 1995、2000］。清水によれば、初期の人類学および西欧近代社会の思考の先験的な方程式として、「固有の社会・文化、その衰退」＋「外的影響」＝「調査地の社会・文化、その現状」が存在し、かつての人類学者は、現状から「外的影響」を取り除くことで、「伝統社会」を構想する、とした［清水 1992］。民俗学にあっては、その誕生と発展の契機の一つが、ある種のロマン主義に基づくことから、この指摘はより明確に意識化しなければなるまい。

この、携帯電話というメディアをとりあげる手法としては、携帯電話の普及が社会に何をもたらしたのかを検討する正攻法と、どこにでもみられるありふれた日常の事例からこのメディアに

人々がどのようにかかわっているのかを検討する手法とがあろう。メディアを専門としてきたわけではない筆者には、前者の正攻法をまとめることは困難であるので、本稿では、ハードルを下げて、おそらくはフィールドワークをする研究者であれば、いたるところで目にするであろう後者の方法から、事例を提出してみたい。

本稿では、携帯電話の再配置、換言すれば、新しい技術としての携帯電話を、当該社会に生きる人々が生活のなかに取り入れることでその志向性に沿って文脈化し、同時にある種の方向性を拡張してゆく様子を取り上げる。この、新たな技術のもたらすせめぎ合いという視点の転換によって、携帯電話そのものを対象化するのではなく、我々のフィールドでみられる現象について携帯電話を介して理解するという、研究の方向性が切り拓かれると思われる。このことは、極めて日常的な道具となった携帯電話をめぐる現象を、それぞれの研究者がフィールドでの研究に加える、あるいは、視野に取り込むことによって、メディアの民俗学的な議論に参加することを可能とする利点が期待できる。

## 4. 近年のメディアを通して中国「広場ダンス」の事例を考えるに —科学技術に支えられた現在の日常生活を考えるための試論として—

上述の背景を踏まえて、本稿では、目の前の、一見メディアとはかかわりのない、広場などでのダンスと、メディア、とくに携帯電話に焦点をあてるものとする[6]。この、各地でみられる、極めて日常的な現象でありながら、決して過去との表面的な連続性を保持していない対象を選択した視点からは、簡単な身体所作から成るダンスと考えられる広場ダンスという現象もまた、様々なレベルでのメディアという現代科学技術の背景のもとで成立していることを確認できるだろう。同時に、携帯電話を支える技術が、技術的に予測される範囲でのみ社会を変容させてゆくのではなく、人々の工夫や応用のなかで文脈を与えられ、意味を見出されている点も垣間見ることができる。この意味で、先述の、清水のいう「外的御影響」を排除しては、理解できない対象といえ、むしろそのモノとの交流のあり方が焦点化されるはずである。

本稿でとりあげる事例である広場ダンスは、狭義には2008年にジャムス（佳木斯）市体育局が、従来の秧歌（ヤンコ）踊りに体育、ダンス、そしてエアロビクスなどの運動要素を取り入れ、健康に有益な有酸素運動として体系化したもの、とされるが、もともとあった公園などでの各種ダンスと融合する形で、爆発的に中国国内外に普及したダンスである（維基百科:「広場舞」）[7]。国民の健康な身体を構築するという意味では、先行する集団ダンスであるラジオ体操や、いたるところで目にする「健身器材」の根拠である1995年から始まった国策である『全民健身計画』の延長上にあるともいえるが、その爆発的な普及と人々の参与で知られる[8]。健康志向の向上という正の側面をもつ一方で、政府への非登録団体の急増というコントロールしがたい集団の発生や騒音問題など、新たな社会現象を引き起こすこととなった。その結果、2015年のCCTVの春節晩会の番組で「最炫小苹果」が広場ダンス集団とともに放映される（2009年の流行歌「最炫民族風」と、2014年の流行歌「小苹果」を混ぜた楽曲に、バックダンサーとして北京群衆芸術館の人々が広場ダンス「らしさ」を強調したジャージ姿でダンスを披露した）[9] 一方で、2015年9月には文化部、体育総局、民政部、住房城鄉建設部によって、「関於引導広場舞活動健康開展的通知」が出され、各地で地方政府によってダンスの時間などを定めた管理情勢が出される、管理と規範化が進められている。

この、現在、中国各地でみられる、ありふれた（日常化した）広場ダンスといえば、自主的で、

外部に対して開放的で、身体を動かすといった特徴から、その身体所作にのみ関心が集まり、メディアとの関連はすぐには思い浮かばないことであろう（写真1）。しかし、集団で統一的な動作をおこなう、という行為とメディアとは、深いつながりが指摘できる。

写真1　空き地で「広場ダンス」を踊る人々
(2015、北京、筆者撮影)

そもそも、広場ダンスと同じく、健康な身体を育成するための集団運動は、中華人民共和国においては、「広播体操」（ラジオ体操）をその嚆矢として挙げることができる。中国の「広播体操」は、1951年11月に公布された、全国民の体質向上を目的とした集団体操である。「広播体操」は、その最初期にはしばしば「辣椒操」と呼ばれたが、これは、中国の「広播体操」のモデルとなった日本の「ラジオ体操」（1928年～）の音訳である。「広播体操」の公布にあわせて、中華全国体育総会籌備委員会、中央人民政府教育部、同衛生部、中央人民革命軍事委員会総政治部らによって「ラジオ体操を普及させることに関する聯合通知」が出され、翌日には『人民日報』に「大家都来做広播体操」と題する文章が掲載され、翌日12月1日から全国で放送が開始された。ここに、歴史上初めて、中国全土で一斉に体操をおこなう、という様式が確立した。

当時は、主に、小中学生や工場労働者らによって実施されたというが、音楽をともなう体操の様式は、一時はおしゃれな流行となっていた、とされる（写真2）。この体操は、時代に合わせて刷新され、文化大革命期に一時期中断されたものの、すぐに継続され（この第五期広播体操（1971年）は、当時の社会を反映して「偉大的領袖毛主席教導我們、発展体育運動、増強人民体質、提高警惕、防衛祖国」の声で始まる。この時に、動作が美しいとされ、模範演技をしてニュース映像に撮影された子供が、のちの映画スター李連傑（Jet Li）である）、2011年には、武術やボウリングの動作などを取り入れた第9期広播体操にいたっている。

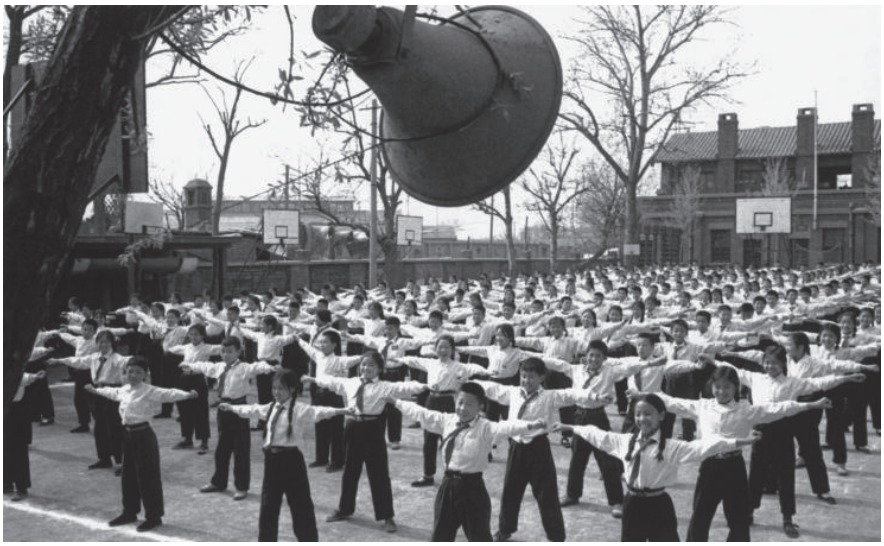

写真2　メディアにより統一された「ラジオ体操」
(出典:「中華遺産」http://www.dili360.com/ch/article/p5350c3da2503183.htm)

このように、全国で一斉に集団で体操をする、という現象の誕生には、それを支える技術としてのラジオというメディアが不可欠であった。

改革開放以降、身体を動かすための伴奏となる音楽を媒介する技術の発展は、個人化を促し、携帯可能なカセットテープデッキの登場は、ディスコやエアロビクスの登場へとつながってゆく。そのさらに延長上にある現在では、各地の公園や道路脇のスペースで、それぞれに自発的な非登録団体である集団を形成しつつ、広場ダンスという形で、朝晩、ダンスが繰り広げられている。この活動は、体育と健康、過去の集団ダンスとの関係、騒音などの社会問題として考察されてきたが、民俗学的に見れば、そこで発生する人間関係とメディア技術の発展と不可分である[10]。

以下、複数の側面から、広場ダンスを支えるメディアを見てゆくものとする。

まず、広場ダンスには、ダンスを踊るための伴奏となる音楽が必要となる。この音楽は、多くの場合、1990年代頃から現在に至るまでの流行歌が選ばれる。この音楽の放送は、先に触れた個人化した音響装置と保存媒体があって初めて可能となる。つまり、広場ダンスを支えている根幹的技術は、（活動歴の長いグループでは、媒体をカセットテープ、CDを経て、）現時点ではパソコンからダウンロードしたMP3形式の音楽ファイルを保存したリムーバルメディアと、持ち運び可能な（古くから活動しているグループでは、カセットテープデッキからCDデッキへの変遷の後）移動式ステレオ装置である。現在では、移動式ステレオ装置は、広場ダンス仕様として、インターネット上のショップである「京東網」や家電店で発売されているが、これは中国以外ではみられな

写真3
インターネットショップや家電店で販売される広場ダンス用移動式ステレオ装置
（上:京東網:2016年8月28日）
（下:街中の家電店での広場ダンス用おすすめ商品、2016、陝西、筆者撮影）

い現象であろう（写真3）。すなわち、普遍的な技術（ステレオ装置）に対して、社会の側からの需要によってアレンジが加えられ、再文脈化されている事例といえる。

つぎに、広場ダンスの大きな問題として、ラジオ体操のような全国での同一時間、画一的な動作がないものの、非常に類似したダンス動作がみられることが考えられる。それぞれのダンスグループが、選択した特定の楽曲に特定の動作を振りつける統一性については、実際にある場所で同一のダンスを踊るという学習過程を観察することで理解できる。このダンス振付の統一性は、グループ前方で踊るダンスリーダー（「領舞」「領頭」「教師」「大媽」などと呼ばれる、グループの中心的人物）を、中心的な常連参加者が模倣し、さらに周辺にて踊る新規参加者（「新手」）や臨時参加者がさらに模倣して学習してゆく、ある種のLPP的状況といえよう。

しかし、ではなぜ全国でダンスの所作や選曲が類似するのか。この問題は、ダンスの場面のみに注目した現場での観察では理解できない。また、新たに選曲した楽曲の所作にダンス集団の人々はついてゆけるのか、この問題も、特定地域の伝承の有機的関係を探る視点からは解釈できないままとなる。

結論を先に述べれば、このダンスの具体的な選曲、振り付けの決定と普及に、メディア、とくにスマートフォンが大きな作用を果たしており、それはすなわち伝播と受容、身体化の問題をなる。

まずは、ダンスの所作について考えてみたい。ダンスの振り付けは、それぞれのダンス集団が独自に考えた創作であって、同時に、そうではない、という側面を持つ。彼女らは、広場ダンスの映像が多数アップされている「糖豆網」（Tangdou.com）をはじめ、「土豆網」（Tudou.com 2005年から正式公開、「毎个人都是生活的导演」（すべての人々が生活の演出家）をスローガンとする）、「優酷網」（2006、"三网合一"（「三網合一」、すなわち、インターネット、テレビ、携帯電話の3つの端末をカバーすることを目標とする。2013年に前出の土豆グループと合併））といった動画共有サイトにアップされた動画（後述するように、専門的な教師（「老師」「教練」）による授業クラス「課堂」的なものから、民間の人々にいたるまで様々なダンスがアップされている。動画配信サイトであるので、機能はYouTubeに近い）から、気に入った楽曲やダンスの動作を選択し、自らのグループのダンスに取り入れる。この意味で、ダンスの動作という素材については、公開されたほかのダンスグループの模倣であり、メディアを介した伝播といえる（写真4）。そして、この模倣は、反復的、拡散的に複製されてゆくために、民俗学でしばしば発想されるプロトタイプからヴァリアントへといった関係性がもはや明瞭ではなくなる点も重要である。

写真4　自分たちの模範とするダンスグループの動画をみせて動作を解説する踊り手
（2016、陝西、著者撮影）

他方で、彼女たちがどのように新たなダンスの振り付けを組み立てるかという受容の側面に着目すると、そこには創作的な特徴が現れる。無数のグループが、自分たちのダンスをアップしているが、そのなかで「自分たちのグループに合っている」、「踊ってみたい」、「動作が美しい」、「曲の雰囲気に合っている」など、彼女の、自分たちのダンスグループへの認識（実際に、グループに適さないダンス所作をおこなうと、参加者はダンスをやめ、これが繰り返されると、他のダンスグループへと人々が移動する原因の一つにもなる）と、審美観（価値観）に基づいている。実際に、

ある「大媽」は、過去の集団ダンスを、自分たちのダンスを比較して、「忠字舞は動作が直線的で、今の時代に合わない」、「民族ダンスの眼の動きと指先がピンとしているのは美しいから取り入れた」など、説明してくれ、筆者が具体的な様子をイメージできないでいると、カバンからスマートフォンを取り出して、すぐに動画をみせてくれた。この価値観を涵養しているのは、現場でのダンスの実演と同様のレベルで、時間的、物理的な距離がどれほど離れていようとも簡単に動画、音声にアクセスできるインターネットメディアの存在にある。広場ダンスの動作を教授するDVDも販売されているが、調査の範囲内では、専門性の高いダンスである「チャチャ」や「ルンバ」、あるいは国内の各種「民族ダンス」のようにダンス教室通う熱心なダンス愛好家ではなく、朝夕公園などで狭義の広場ダンスを踊る人々には、モバイル端末で参照できるネット動画のほうが大きな影響力を持っているといえる。

次に、同一グループ内では、どのようにダンスの所作が統一化されているのかを考えたい。統一的動作によるダンスを構成するもっとも大きな理由は、同一の場で繰り返し踊ることにある。多くのダンスグループの場合、すべて参加すれば、朝夕、それぞれ2時間にわたるダンスを毎日繰り返す。この反復的行為は、身体を特定の動作に習熟させてゆくこととなる。しかし、新しい振付がすべて、長い時間をかけた習熟の成果であるとは限らない。たとえば、新しいダンス振付をメンバーが共有する過程をとりあげてみたい。多くのダンスグループは、メンバーシップの緩やかな会員によって構成されている。会員からは、毎月僅かな会費が徴収され、ステレオ装置の電気代などに充てられている。ここでの会員登録は（そのグループの組織者にもよるが）、多くの場合、スマートフォンを用いたSocial networking serviceを利用している。筆者の参加している諸グループは、「微信站」（microblog station）を利用することが多いが、この会員制の登録型コミュニティ機能を用いることで、雨でダンスが中止になる、忘れ物があるなどの連絡事項から、最近の話題にいたるまで一様に発信されている。すなわち、SNSの機能を使って、当該のダンスのグループに会員登録することで、「舞友」ともいうべき、選択的なコネクションを形成している。この点で、ダンスの場で直接観察可能な、だれでも参加できる開放性とは異なる広場ダンスの側面、つまり、SNSという外部には閉鎖された集団性を認めることができる。この新たな集団をあたかも対面的状況と同じように生み出すSNSの機能は、この20年余り急速に流動化が進む現代中国にあって、非常に重要な意味をもつこととなった。

広場ダンスでは、彼女らは、この新たに手に入れた閉鎖的回路を利用することで、新しい楽曲とその振付を自分のグループの会員に配信し、事前の練習、広場ダンスの時間以外での練習を可能としている。その結果、新たなダンスに対しても、ある程度の同一性をもつ個々人の動作が獲得されているのである。その意味で、このSNSを活用したネットワークもまた、広場などで観察可能な集団的景観を生み出す後景の装置となっている、ということができる。

写真5　動画配信用の映像を撮影する広場ダンスのグループ
(2016、南京、筆者撮影)

こうして練度を挙げたグループのなかには、自らのダンスの様子を、先述の動画配信サイトへとアップする集団が現れている（写真5）。こうしたグループは、多くの場合、

一般の広場ダンスよりも少人数で、ユニフォームを統一するなど、ダンス集団としての意識が高い傾向がある。これらの人々は、自ら情報を発信することが可能な、自己表現の場として、先述の動画配信サイトや「微博」（Weibo）[11] を利用する。このサービスを利用して、自分たちのグループの動画を公開している人々のなかには、広場ダンスの修練と公開を、姑や子供との家族関係に悩む、介護で疲労するなかで、「自分らしさ」を取り戻す機会として考える者もいる。アップされた動画が多くの視聴者を集めること、そして、「いいね」ボタンがクリックされることは、大きな自己肯定となっている。この動画公開というは行為には、実際の、回避しがたい日々の生活のなかで、意識のうえでの「非日常」と「日常」を区分する方法と、生活の美学を求める思考に繋がるひとつの契機を読み取ることができる。ここでアップされた動画は、先述のように、各地の広場ダンスの選曲、振り付けの参考として資源化し、循環してゆくこととなる。

もちろん、ここまで挙げてきた、ダンスの動作を形成してゆく動画を伝達するという機能を持ったメディアは、スマートフォンに限らない。パソコンでDVDを見る、パソコンでネット上の動画を見ることも可能であるし、実際にそれらの行為もみられる。しかし、広場ダンスにとってスマートフォンが重要な役割を果たすのは、それが野外で、しかも、空間を臨時に占拠しておこなう集団ダンスである点にある。このために、携帯性（モバイル）を備え、なおかつ、今日急速に進化し、通話という一対一の関係性という拘束を超え、カメラや地図、タクシーの呼び出しと支払いまであらゆるニーズに応える万能の利器、文字通りのマルチメディアとしてのスマートフォンが利用されるのである。

以上、集団で踊るという、ごく基本的な要素から成る中国の広場ダンスにおいても、この現象が現代的なテクノロジーによって支えられ、観察可能な実践となっていることを示した。そのことで、日々の活動が現代的テクノロジーと切り離せない今日的状況を事例化したつもりである。おそらく、この程度の技術的依存は、現在では、どのフィールド、どの対象であってもみられるものと考えられる。必要なことは、こうした目の前にある状況を、民俗学が扱ってこなかった対象であることを理由に、考察のフレームワークから外さない、という視野にある、と思われる。

## 5. 小結

本稿では、日本民俗学のメディア研究を簡単に振り返り、その動向が、メディアの機能のうちのひとつである、記録保存についての視野に偏重し、対象としての現代メディア研究が希薄であったことを指摘した。その理由として、仮説的に、1）民俗学のアカデミック化過程における歴史学との関係のなかでの学問の規定、2）コミュニケーションメディアである携帯電話に引き付けてみた場合、口承文芸と、民具を中心とする学会の分化を挙げた。

そのうえで、民俗学がコミュニケーションメディアをとりあげる必要がある理由として、それが、日常化し、多くの人々の生活のなかに浸透していること（普及）と、それが様々な形で人々によって利用されることで、今日の日常生活が形成されていること（再文脈化）を挙げ、現代学を標榜する民俗学にあって、これがどのように生活を変容させ、またこの現代技術に支えられたモノがどのように生活の中に再配置されているのかを考察する必要があることを指摘した。

その一例として、中国の広場でおこなわれる集団ダンスという、現代科学技術やメディアからほど遠いと思われる事例を挙げて、この現象を支えている技術やメディアについて携帯電話を中心に明らかにした。そこでは、価値の伝達と共有、情報の伝播、複製と身体化、情熱と羨望、流

動化と選択的コミュニティ形成、日常のなかでの非日常の創造と生活の美学といった民俗学にとって重要な問題との関係で説明できる要素がみられた。

このように、民俗学が広場ダンスをとりあげる必要は、それが秧歌踊りなどの要素が盛り込まれる民間舞踊の現代版という意味においてではなく、このありふれた、各地でみられる現象を民俗学的視点から解説することで、我々の現代生活を解説する可能性があるからである。

おそらくは、民俗学がこうした現代メディアを主題化するうえでは、携帯電話やインターネットといったテーマについてそれがもたらした社会変化を正面から論じる手法がもっとも有効であろう。しかし、それと同時に、それぞれのフィールドや研究テーマでのメディアを論じることで、それらを積極的に考察のフレームに導入する状況を形成することも可能であろう。そして、その際に、求められる視線とは、新たなメディアを従来の状況を阻害する「外的要素」として除外するのではなく、新規のモノと、人々がどのような関係性を取り結んでいるのか、そして、モノを使って、どのように人と人が結びついているか、を汲み取るものであろう。それでこそ初めて、現代社会を観察し、「公民として病みかつ貧しい」［柳田 1931（1993）］状況をより改善する議論を展開することができるのではなかろうか。

## 注

1　筆者は、2000年に陝西省中部農村のフィールドワークを開始した際に、生活用具の調査をおこなった。以来、15年にわたって、同一の村の調査を続けているが、そこで目を見張る大きな変化のひとつに、物質文化の変化を挙げることができる。

本稿の関心事である電話についていえば、フィールドワーク開始時には、村の掲示板に「電話を導入すれば、今日のリンゴ市場の価格がわかる」というスローガンが掲げられ、固定電話の設置が進められていたが、設置費用が高額なため、多くの人々は小売店の公共電話を使用していた。家庭に固定電話があった家は、村の書記(1991年に導入)のほか、17軒のみであった(主に、都市部に子供がいる家、商売をしている家が連絡のために設置)。携帯電話は、筆者の居住した村民小組では、村書記(1999年購入のMotorola製)、「包工頭」(人足頭)をしていた男(1999年購入のNokia製)と、私(1999年購入のSiemens製)のみであり、製造メーカーをみる限り、典型的な外来文化であった。ただ、興味深いことに、これらの携帯電話は、ステータスのシンボルのみならず、時に貸し借りがおこなわれ、完全に個人と結びついていたわけではない、ことである。そして、この用法は、先行するポケベル(「BP機」)の村での用法に連続していた。

調査開始から15年以上経った現在では、家庭共有の固定電話を廃止し、電話は個人各自の携帯電話のみという家庭も少なくない。そして、これら道具としての携帯電話は、とくに老人にとっては、自ら購入するものではなく、子供たちの携帯電話の買い替えに伴って譲渡される傾向がある。

なお、この村でも2011年、都市の様子を模倣して、広場ダンスが踊られるようになっている。

2　個人的には、ここで指摘された困難さは、日々の当たり前の事実が記事化されにくいという問題であり(何を記事にするか＝What)、それがどのような枠組みで記事化されるのか(どのように伝えるか＝How)、という問題とはレベルを異にする、と考える。

3　別の文脈から「電承」の造語へたどり着いた民俗学者もいることを特記したい。福間は、人々の語りと新聞記事をもとに、メディアで放送された祭礼行事が、地理的にはるかに離れた地域に受容されていく過程を、テレビ、実際の人々の交流、身体化、正統性、人々の羨望といった点から論じ、それを「電承」と命名している［福間 2004］。これは、口承文芸に終始しがちな民俗学的メディア研究の一つの突破点といえるものである。

4　ただし、口承文芸を中心としつつも、伝播と受容、複製、再生産のプロセスについて、示唆的な民俗学的メディア論考もみられる(例えば、法橋:2000)。

5　中国では、現在、日本でなじみのある海外由来の、そして本文で重要な意味をもつサービス、たとえばFacebookとtwitterは2007年以降、動画配信であればYouTubeは2009年以降、LINEは2014年以降、遮断されており、使用できない。その代わりに、これらの機能に相当する、中国独自のサービスがそれぞれ用いられている。

6　すでに、広場ダンスについての民俗学的なアプローチとしては、周による優れた分析がある［周 2014］。ここでは、過去の集団ダンスとの連続／非連続について、社会変容との関連から詳細な分析が加えられており、広場ダンス全体についてはこちらを参照されたい。

7　ダンスの形式からみた狭義の広場ダンスは、本文で記したように、政府主導でごく近年に始められた単純な動作からなるダンスだが、実際の広場や空き地で活動するダンス集団は、ラジオ体操に近い運動から、高度なステップを要するチャチャ (Chacha)やルンバ(Rumba)、ジルバ(Jitterbug)などラテンダンス系の社交ダンス、ウイグルやチベットなどの少数民族ダンスなど、様々なダンスが融合しているものも多い。そこで、ここでは、公園などでの活動をおこなうこれらの自発的ダンス集団を総称して、広義の広場ダンスとして扱う。

8　実際には、健康への志向のみが、広場ダンス参加者の動機ではない。嫁・姑、職場の愚痴などダンスの合間のおしゃべり、情報交換の場としての機能、余暇の過ごし方の発見、ダンスの上達への情熱など様々な要素が介在する。詳細は別稿に譲るが、ここでの選択的縁による社会関係は、ともに汗を流す「熟」的人間関係を形成し、経験の共有と相まって、対等な仲間としての関係、扶助の相互性関係性は、時として上位世代の介護や健康に関するSelf-Help GroupやGroup Counselingの様相を呈することもある。

詳細は別稿に譲るが、ここでは、個人化へと人を導くことが予想された携帯電話が、既存の社会的傾向性のなかで変容し、流動化、個人化に代表される再帰的状況のなかで新たな「人」のあり方へと展開している点のみを指摘しておく。

9　「小蘋果」(Little Apple)は、筷子兄弟(Chopsticks Brothers,肖央と王太利によるグループ）により2014年の映画「老男孩之猛龍過江」の主題歌として作成された。ダンスの振り付けは「江南スタイル」(Gangnam style)のクリエーターが作製していることもあり、韓国で撮影されたOfficial Music Videoには韓国語、韓国的服装が多用されている。

10　この広場ダンスについては、王菘興、末成道男らの提示した概念および「差序格局」概念をもとに、そこで繰り広げられる人間関係を中心に考察した別稿を用意している。そのため、ここではメディアに関する部分のみをとりあげるにとどめる。

11　1998年に合併成立した「新浪」(SINA)、「騰訊」(Tencent)、「搜狐」(SOHU)、「網易」(NetEast)とならぶ中国４大ネットセンターの一つ)が、2009年から開始したサービスで、日本で使われているFacebookとtwitterに類似した機能を持つ。

## 参考文献


阿南透 2000「電話」福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典』（下）、吉川弘文館、173-174

伊藤龍平 2008「ネット怪談「くねくね」考―世間話の電承について―」『世間話研究』18号、1-13

伊藤龍平 2016『ネットロア―ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』青弓社

奥野卓司 2009『情報人類学の射程―フィールドから情報社会を読み解く』岩波書店

木村大治 2009「携帯とインターネット」日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、504-507

金嘆和（Kim Kyoughwa）2016『ケータイの文化人類学』クオン

清水昭俊 1993「永遠の未開文化と周辺民族」『国立民族学博物館研究報告』17巻3号、417-488

周星 2014「秧歌舞/忠字舞/广場舞―現代中国的大衆舞踏」、2014年中国芸術人類学国際学術研討会発表原稿（2014年11月）

杉田繁治 1987「コンピュータ民族学」石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂、294-295

関本照夫 1986「モニュメントとしての歴史」関一敏編『人類学的歴史とは何か』海鳴社

羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広編 2012『メディアのフィールドワーク―アフリカとケータイの未来』北樹出版

林英一 2001「生活道具としての携帯電話―今時の女子高生による活用法―」『日本民俗学』225号、84-101

林淳 2011「アカデミック民俗学の成立―宮田登を中心に」『愛知学院大学文学部紀要』40号、314-299

福田アジオ 1983「民俗学研究法」福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文館、265-269

福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編 2006『精選日本民俗辞典』吉川弘文館、14

福間裕爾 2004「ウツスということ－北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』114号、155-226

法橋量 2000「フォークロアとマスメディア－ドイツのタブロイド紙を材料として」『世間話研究』10号、132-146

宮武公夫 1995「現代技術と社会変化:人類学的技術研究へ向けて」『年報人間科学』16号、163-179

宮武公夫 2000『テクノロジーの人類学』岩波書店
森栗茂一 2001「民俗学に求められる社会的説明責任と学問の脱構築－情報化社会では、学術特化は陳腐」『日本民俗学』227号、267-277
柳田國男 1931（1993）『明治大正史世相篇』（新装版）、講談社
吉見俊哉・若林幹夫・水越伸編 1992『メディアとしての電話』弘文堂
Dorst, Jhon, 1990, "Tags and Burners, Cycles and Networks: Folklore on the Telectronic Age", *Journal of Folklore Research*, Vol.27, No3, pp.179-190.
Wilson, Samuel M. and Leighton C. Person, 2003, "The Anthropology of ONLINE Communities", *Annual Review of Anthropology*, Vol.31, pp.449-467.
維基百科:「広場舞」(https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%BF%E5%9C%BA%E8%88%9E　2016年8月19日アクセス）